HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	標準語・関西方言との比較からみる広島方言の「のだ」形式
Author(s)	高雄, 芙美
Citation	研究論集, 14, 125(左)-141(左)
Issue Date	2014-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57695
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_008_Takao.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

標準語・関西方言との比較からみる広島方言の「のだ」形式

高　雄　芙　美

要　旨

西日本各地で標準語化とともに関西方言化が進んでいるが広島では他地域ほど関西方言化が見られないことが指摘されている。この他地域とは異なる広島方言の特性を捉えるためには広島方言の実態を明らかにする必要がある。本稿では広島方言の「のだ」形式について，標準語，関西方言と比較し記述することで，広島方言の文法的特徴の一面を明らかにする。加藤 2003，2006 によると「のだ」は，命題内容について判断済みの情報である，ということを表す。また終助詞「よ」は命題内容について，発話者が排他的な知識管理をおこなう準備あること示す。どちらも話者の知識管理に関わる談話マーカーである。広島方言，関西方言では名詞化辞「の」は「ん」となり，「のだ」は広島方言では「んじゃ」，関西方言では「んや」となる。「んじゃ」「んや」の前が否定辞「ん」「へん」など撥音のときは「のじゃ」「のや」のようになる。「んじゃ」「んや」は言い切りの場合，気づき・発見の用法で使われることが多い。自分の情報を披瀝する場合は広島方言では「んよ」，関西方言では「ねん」が使われることが多い。広島方言では「*んじゃよ」とはならず「んよ」と，名詞化辞「ん」に直接「よ」がつく。伝聞の形式「んと〔んだって〕」も名詞化辞「ん」のあとにコピュラ辞が現れない。推量形や従属節などは広島方言では「んじゃろう」「んじゃけど」のように「んじゃ」が現れるが，関西方言では「んやけど」「ねんけど」のように「んや」「ねん」の両方が現れる。また「のなら」「のだったら」のような仮定形は広島方言では「んなら」が一般的で，関西方言では「なら」は使われず「んやったら」が一般的である。広島方言では従属節の「んじゃけー〔んだから〕」，「んと〔んだって〕」で在来の方言形が保たれているが，関西方言では「んやから」「んやって」のように標準語と同じ形式が使用されている。関西方言は「ねん」のような独自の方言形式を持つ一方使用頻度の高い文法形式に標準語化が見られる。広島方言は「ねん」のような独自の形式はないが，「のだ」形に用いられるような使用頻度の高い文法形式で在来の方言形を保持している。

1．広島方言とは

広島方言は西日本方言に属し中国地方広島県域で話される方言である。中国地方の中国とは上方と九州の中ほどの距離の地域という意味であるが，中国地方の方言について，鏡味 1982：33 は「九州ほど古典語の古い姿を残存しないが，中程度に上方の古い用法を残している方言の地域」であると述べている。さらにその中国地方の中ほどに位置する広島方言の特徴について，神鳥 1982：140 は，中国・四国地方の方言を比較して「四国方言が新態を，山陰，中でも雲伯方言が古態を示しているのに対して，広島県域方言はその中間程度の状態にあるといえる。しかし，山口県域と比較すると，広島県域方言はいささかの古態性を示していると見られる」と述べている。西日本の中で中間的な中国地方のさらに中間に位置する広島県域方言は古い形を残しているわけでもなく，かといって新しい形を示すのでもない，際立った方言的特徴が他地域ほど見られないことから，方言研究の対象として取り上げられることがあまりなかった。

現在，標準語の影響が各地域方言に及んでいることは言うまでもないが，西日本ではさらに関西方言の影響力も強まり，四国や九州，山口など各地で関西方言形への変化が見られることが指摘されている。しかしその中にあって広島ではそれらの地域ほど関西方言化が見られないことが指摘されている。友定 1995：123 は「広島は，中国地方のなかで，関西に接した岡山や，九州に接した山口と異なり，自らの文化的優位性を，直接的に隣接した地域から脅かされてはいないのである」さらに「これは当然ながら方言においても，共通語化は否定しようがないものの，他方言からの影響を受けにくいということになる」と述べている。西日本の他方言で標準語化とともに関西方言化が進む（新しい形式が受け入れられる）中で，広島方言は従来の「新しくもなく古くもない」形を保持するという状況にあることが示唆される。このように西日本他方言とは異なる状況を示す広島方言の性質について明らかにしたいと考える。

広島方言は西日本方言に属し，文法形式などは西日本方言の特徴を示すが，アクセントは近畿，四国，九州と異なり東京式である（この特徴は中国地方全般に見られる）。また平山編 1998：14 に「広島県域の人々は，自分たちの近隣地域の方言についての認知度よりも，国の文化的・経済的中心地の方言に対する認知度・使用度のほうが高いということがわかる。また，関西と言うかつての中心地よりも東京という現在の中心地の方言に対する認知度・使用度のほうが，はるかに高いということもわかるのである」とあるように，東京への志向が強い面があることが指摘されている。同じ西日本であることから，広島方言は関西方言と同じようなものだろう，という見方を他方言の話者からされることもあるが，広島方言話者は広島方言と関西方言は別のものであるという意識が強い。標準語も広島方言とは全く異なるものと認識されているが，広島方言話者にとって標準語の威信は高く，標準語への抵抗感はそれほどない。

本稿では広島方言の「のだ」形式について，標準語，さらに同じ西日本方言であり強い影響力を持つ関西方言と比較し，記述することで，広島方言の文法的特徴の一面を明らかにしたい。

2.「のだ」と「よ」の意味・機能

本稿では関西方言と広島方言の「のだ」表現について記述をおこなうが，その意味，機能は基本的に標準語と同様であると考える。2 では標準語の「のだ」，さらに後述する関西方言，広島方言の「のだ」表現に関わる終助詞「よ」の意味，機能についてまとめる。「のだ」や「よ」については多くの先行研究があるが，ここではその詳細について議論の対象としない。以下では加藤 2003，加藤 2006 の記述をもとに，「のだ」と「よ」の意味，機能についてまとめる。((1)～(6)の例文は加藤 2003 による)

2.1.「のだ」の意味・機能

文法的な機能に注目すると「のだ」の「の」は直前の節を名詞的要素にする働きを持ち，「だ」は叙述の機能を担う。(1)の場合，「大根の煮たの」は「大根の煮たもの」のことである。

(1)　今日の夕食は，大根の煮たのだ

(2)　春が来たんだ（←春が来たのだ）

しかし，(2)の場合「春が来たの」はコトであり，(1)のようなモノの意味とは異なる。「のだ」が談話的要素として用いられていると考えられる。その場合の「のだ」は，「のだ」がつく文の内容は成立するものであるという判断がすでに確定している**判断済み**の情報である，ということを表す。

(3)　私はヨーロッパに行ったことがないのです

(4)　【汗をかいている人に対して】暑いんですか？

(5)　【建物の入り口を探していて】あっ，あそこが入り口なんだ

(6)　早くこっちへ来るんだ

先行する文脈や言語化されていない状況や知識について，その実情や背景や理由は「…のだ」と補足説明をする際に用いられることが多い。「p ということは q ということなのだ」のような論理構造が「q のだ」と現れることが多い。(4)の場合，「汗をかいている」ことを前提とし，そこから「暑い（のだ）」という判断をしたうえで疑問の形で提示している。疑問の場合，すでに判断したことを聞くということから，確認の機能が前面に出る。(5)のような気づき・発見で用いられる場合，「あそこが入り口だ」ということは気づく以前に確定しており，成立するという判断の済んでいる規定性のある情報である。気づき・発見の用法は確定した情報を新しく知識に導入したことを標示する用法である。(6)は命令などで用いるもので，その行為や動作をおこなうことが当然であるかわかりきった判断で，すでに確定したこととして示されると，命令や強制の機能が出る。

2.2.「よ」の意味・機能

関西方言，広島方言で扱うのは「よ」であるが，ここでは説明のため「ね」も一緒に取り上げる。終助詞「よ」や「ね」を談話において知識管理に関する態度を表示する標識として考えた場合，「よ」は話題になっている命題内容について，発話者が排他的な知識管理をおこなう準備があることを，「ね」は話題になっている命題内容について，発話者が排他的な知識管理をおこなう意思がないことを示すマーカーである。

(7)　私は疲れているんだよ

(8)　ほら，帰るよ

(9)　私出かけてきますね

(10)　あなたはフランスに詳しいね

「よ」は話者が排他的優先性を以って当該知識を管理することを表すため，(7)のように，自分の情報には「よ」が無標である。(8)のように相手の情報（相手の判断が優先性を持つ場合）に「よ」がつくと，命令や強制に近くなる。「よ」は相手に判断させる余地を与えないと言える。「ね」は話者が排他的優先性を以って当該知識を管理しないことを表すため，(10)のように，相手の情報には「ね」が無標である。(9)のように自分の情報，自分が独占的に判断することに「ね」がつくと，その情報・知識に対して相手に介入する余地を与える。

3．広島方言の「んじゃ」「んよ」

広島方言における「のだ」表現を見る。主に若年層での使用を想定し，記述をおこなう[1]。また意味や機能については，２の標準語「のだ」に準ずると考えるので，ここでは「んじゃ」や「んよ」の意味・機能についてはいちいち取り上げない。また「んです」のような丁寧体については議論が複雑になるためここでは記述対象外とする。

標準語「のだ」に相当する広島方言形は「んじゃ」である。後述する関西方言でも同様だが西日本方言では基本的に「のだ」の「の」は「ん」となる。(11)のような「の（か）」疑問文では，「帰るの？」ではなく「帰るん？」のように「ん」を用いる。「か」は現れないのが一般的である。否定形の場合，否定辞が「ん」であるため「*帰らんん？」のようにはならず，(12)の「帰らんの？」のように「の」が出る。(13)のように「のん？」となる場合もある。(12)との意味の差はなく「帰らんのん」のように音調をそろえるために「ん」が付加されるのではないかと思われるが，推測の域を出ない。

(11)　もう帰るん？

〔もう帰るの？〕

[1]　記述は筆者（1984 年広島県広島市生まれ，18 歳まで在住）の内省による。

(12)　まだ帰らんの？
　　〔まだ帰らないの？〕
(13)　まだ帰らんのん？
　　〔まだ帰らないの？〕

西日本方言では「のだ」の「だ」の部分にはそれぞれの方言のコピュラ辞が現れる。コピュラ辞に「や」を用いる地域では「んや」，コピュラ辞に「じゃ」を用いる地域では「んじゃ」が用いられると考えられる。広島方言のコピュラ辞は「じゃ」であり，「のだ」は広島方言では「んじゃ」となる。

3.1.「んじゃ」

広島方言の「んじゃ」は次のように用いられる。言い切りの場合，気づき・発見の用法で使われることが多い。

(14)【聞き手が今日誕生日であることを今知って】あ，今日誕生日なんじゃ
(15)【建物の入り口を探していて】へー，ここから入るんじゃ
(16)【聞き手が今日誕生日であることを今知って】*あ，今日誕生日なのじゃ
(17)【建物の入り口を探していて】*へー，ここから入るのじゃ

(16)，(17)のように「のじゃ」を使うのは不自然である。標準語でも「あ，今日誕生日なんだ」とは言えても「*あ，今日誕生日なのだ」とは言えないのと同様である。

【自分が北海道に行くことを披瀝する場合】

(18)　？？？来週北海道行くんじゃ
(19)　？来週北海道行くんだ
(20)　来週北海道行くんよ

(18)のように自分の情報を提示するような披瀝での「んじゃ」使用は普通の発話では不自然である（ただ「じゃ」の音調によって自然になる場合もあるが，ここでは扱わない）。(19)の標準語（東京方言）形の言い切りの形でも，セリフとしては使われるだろうが実際の発話では自然度は低いのではないか。このような場合広島方言では(20)のように「〜んよ」となるのが自然である（「〜んよ」については次節で述べる）。

「んじゃ」は次のように従属節や推量の形でも現れる。実際の発話では(21)〜(24)のように従属節や推量の形で現れることも多いと思われる。(24)では「んなら」という形式が現れる。関西方言では「行くんやったら」となるが，広島方言では「行くんなら」が自然である。

(21)　来週北海道行くんじゃろう
　　〔来週北海道に行くんでしょう〕
(22)　来週北海道行くんじゃけどまだ宿とっとらん
　　〔来週北海道に行くんだけどまだ宿をとっていない〕

(23)　来週北海道行くんじゃけーえーじゃん
　　〔来週北海道に行くんだからいいじゃない〕
(24)　北海道行くんならお土産こーてきてよ
　　〔北海道に行くのならお土産を買ってきてよ〕

また「んじゃ」は直前の音が撥音の場合，「のじゃ」あるいは「のんじゃ」となる。「んじゃ」を用いることはできない。「のんじゃ」あるいは後述する「のんよ」は若年層，女性に使用が多いと思われる。先に述べたように「の」と「のん」に意味的な違いはない。

(25)　全然わからんのじゃけど
(26)　全然わからんのんじゃけど
(27)　*全然わからんんじゃけど
(28)　明日行かんのじゃろう
(29)　明日行かんのんじゃろう

広島方言の場合，「んじゃ」の直前の音が撥音になるのは否定辞「ん」が用いられるときである(関西方言の否定辞「へん」は使用されない)。(30)平叙→「ん(じゃ)」，(31)否定→「の(じゃ)」となる。

(30)　行くんじゃないん
　　〔行くんじゃないの〕
(31)　行かんの（ん）じゃないん
　　〔行かないんじゃないの〕

3.2.「んよ」

3.1 で述べたように，自分の情報を披瀝する場合，広島方言では「んよ」という形が用いられる。標準語の「んだよ」に相当するが，広島方言では「*んじゃよ」という形にはならず，「んよ」となる。「*んじゃよ」は年代，性別問わず使用されない（「んじゃね」という形式は使用される。「ね」については本稿では扱わない)。

(32)　私，辛いもの苦手なんよ　〈自分の情報〉
(33)　*私，辛いもの苦手なんじゃよ　〈自分の情報〉
(34)　へー，辛いもの苦手なんじゃね　〈相手の情報〉
　　〔へー，辛いもの苦手なんだね〕

「んよ」の場合も直前の音が撥音の場合，「のよ」あるいは「のんよ」となる。

(35)　全然話聞かんの（ん）よ
(36)　A「なんで遅刻したん？」
　　〔なんで遅刻したの？〕
　　B「じゃけー，寝坊よ」

〔だから，寝坊だよ〕

広島方言では名詞化辞「ん（の）」に直接「よ」がつき，「んよ（のよ）」となる。「じゃよ」という形式がないため，(36)のように名詞にも直接「よ」がつく。標準語の場合，名詞や「の」に直接「よ」がつくと女性的な言い方に聞こえやすいが，広島方言ではそのようなことはない。「じゃよ」という形式自体が許容されないなめ，年代，性別問わず「名詞＋よ」，「ん（の）よ」という形式が使用される。

4．関西方言の「んや」「ねん」

関西方言には次のような「のだ」相当表現があるとされる。これらの表現は年代や性別によって使用に差があると思われるが，ここでは主に若年層での使用を想定し，記述をおこなう[2]。また関西方言といっても地域によって形式や用法に違いがあると考えられるが，ここでは大阪方言での用法を中心に考える。意味や機能については，2の標準語「のだ」に準ずると考えるので，「んや」や「ねん」の意味・機能についてはここではいちいち取り上げない。また「んです」のような丁寧体については議論が複雑になるためここでは記述対象外とする。

(37)　あ，今日誕生日なんや

(38)　明日行くんやろう

(39)　全然話｛聞か／聞け｝[3] へん｛のや／ねや｝て

(40)　明日仕事あんねん

(41)　来週東京行くねん

関西方言も広島方言同様，「の（か）」疑問文は(42)のように「ん」を用いるが，関西方言は動詞「～る」が撥音便化することがあり，その場合(43)のように「の」となる。また(44)のように否定形になったときも「の」となる。広島方言の場合，動詞「～る」が撥音便化することはあまりなく，「のだ」の「の」に当たるものは平叙→「ん」，否定→「の」となるが，関西方言は平叙でも「ん／の」が両方現れるため，広島方言よりも記述が複雑になる。

(42)　もう帰るん？

(43)　もう帰んの？

〔もう帰るの？〕

(44)　まだ帰らへんの？

---

[2] 例文の形式や自然度などに関しては大阪府出身の話者の意見を参考にしたが，基本的に記述は筆者の観察による。

[3] 関西方言では動詞否定形に「聞かへん」「聞けへん」などのいくつかの形があるが，以下では「聞けへん」の形のみ記述する。

〔まだ帰らないの？〕

4.1.「んや」

標準語の「のだ」に相当する関西方言形は「んや」である。広島と同じ西日本方言であり，「のだ」の「の」は「ん」となる。関西方言のコピュラ辞は「や」であり「のだ」に当たるものは基本的には「んや」となる。

(45)　【聞き手が今日誕生日であることを今知って】あ，今日誕生日なんや

(46)　へー，ここから入るんや

(47)　【聞き手が今日誕生日であることを今知って】*あ，今日誕生日なのや

(48)　？？？へー，ここから入るのや

(47)のように「のや」が使用されると不自然である[4]。上記の用法は気づき，発見の場合である。「んや」が言い切りで使われるのはこの用法であることが多い。

【自分が北海道に行くことを披瀝する場合】

(49)　？？来週北海道行くんや

(50)　？来週北海道行くんだ

(51)　来週北海道行くねん

(49)のように自分の情報を提示するような披瀝での言い切りの形は普通の発話ではあまり出ないと思われる。関西方言では(51)のように「ねん」を用いた表現のほうがより自然だと考えられる（「ねん」については次の節で述べる）。

「んや」は次のように従属節や推量の形でも現れる。実際の発話では(52)～(55)のように従属節や推量の形で現れることも多いと思われる。広島方言の場合，(55)のような場合は「んなら」という形式になるが関西方言では「んやったら」となる。

(52)　来週北海道行くんやろう

(53)　来週北海道行くんやけどまだ宿とってへん

(54)　来週北海道行くんやからえーやん

(55)　北海道行くんやったらお土産こーて（買って）きて

また「んや」は直前の音が撥音の場合，「のや」あるいは「ねや」となる。「んや」を用いることはできない。

(56)　全然話聞けへんのや

(57)　全然話聞けへんねや

---

[4] ただ，広島方言の場合は平叙では「んじゃ」のみで「*のじゃ」は使用されないが，関西方言の場合は平叙で「のや」が全く使用されないとは言えない。その点は考慮する必要があるが，本稿では平叙では「んや」を基本として記述する。

(58)　*全然話聞けへんんや

(59)　明日仕事あんのや

(60)　明日仕事あんねや

「のや」「ねや」は直前の音が，否定辞「へん」，「ん」や動詞「〜る」が撥音便化したもの，の場合に現れやすいと考えられる。「ねや」は「のや」の異形態であると考えられる。大阪方言では「行かへん」以外に「行けへん」の形が用いられるように，「へん」の前につく動詞の母音が「へん」の母音 e に影響され，「行か（へん）」→「行け（へん）」のように変化する。「のや」も「へん」あるいはその前の「行け」などの動詞活用部分にも影響を受け母音が変化し「ねや」となることが考えられる。後述する「ねん」の影響もあるだろうか。また「ねや」は「のや」の異形態であり，「の」単独の異形態として「ね」があるわけではない。そのためそもそも「のや」が現れないところでは「ねや」も現れないと考えられる。

(61)　あ，今日誕生日なんや

(62)　*あ，今日誕生日なのや

(63)　*あ，今日誕生日なねや

(64)　まだ帰らへんの？

(65)　*まだ帰らへんね？（i.m.＝(64)）

「のや」と「ねや」は使用に年代差，性差があることが考えられる。若年層，女性，のほうが「ねや」を使うのではないかと予測される。その場合「のや」という従来の形式がマイナスのイメージ（古い，男性的，粗野など）を持つようになり，その形式を避けたいという動機から「ねや」が使われるようになったのではないかと考えられる。

4.2.「ねん」

関西方言では「んや（のや）」とともに「のだ」相当表現として「ねん[5]」が使用されている。「ねん」は先行研究でも指摘されているように標準語「んだよ」に相当すると考えられる。関西方言では「の＋だ」と「の（だ）＋よ」が別の形式で表されるという点に特徴がある。

(66)　来週北海道行くねん

(67)　全然知らんねん

(68)　明日仕事あんねん

(69)　明日仕事あるねん

「のや」「ねや」の現れる環境を考えると，「ねん」も直前の音が撥音（否定辞「ん」「へん」，動詞「〜る」が撥音便化したもの）の場合に現れやすいと考えられる。実際には(69)のように

[5] 「ねん」は「先週北海道行ってん」のように過去形の場合，「てん」という形になる。本稿は広島方言の分析が主眼であり，また記述が複雑になるため，「てん」については記述対象外とする。

撥音ではない動詞基本形につく場合もあるが，それは「あん（ねん）」→「ある（ねん）」のように撥音便化しない基本形にもつくように用法が拡張したためだと推測される。

また，「ねん」は(71)のような気づき・発見の場合には使用されない。これは(73)のように「んだよ」が気づき・発見の場合には使用されないのと同様である。

【聞き手が北海道に行くことを今知って】

(70)　あ，北海道行くんや

(71)　*あ，北海道行くねん

(72)　あ，北海道行くんだ

(73)　*あ，北海道行くんだよ

4.3.「んや（のや／ねや）」と「ねん」の比較

ここまで記述してきた「んや（のや／ねや）」と「ねん」についてまとめる。まず，「んや」と「のや」は意味的には同じ「のだ」に相当するものであるが，実際の発話では音韻環境によってそれぞれ使用される場合が異なる。「ねや」は「のや」の異形態である。「んや（のや／ねや）」と「ねん」は同じ「のだ」相当表現として扱われることが多いようだが，「んや」は「んだ」，「ねん」は「んだよ」に相当し，基本的に別のものであると考えられる。実際の発話でも「んや」と「ねん」が同じように使える場合というのは限られている。まず言い切りの場合，気づき・発見の用法では「ねん」は使えない。「んだよ」が使えないのと同様である。

【聞き手が北海道に行くことを今知って［気づき・発見］】

(74)　あ，北海道行くんや

(75)　*あ，北海道行くねん

【言い切りの形で。発話者自身が北海道に行く場合［披瀝］】

(76)　？？来週北海道行くんや

(77)　来週北海道行くねん

(76)，(77)はどちらも適格であるとされるが，実際には(77)「〜ねん」のほうが自然で，「〜んや」は「〜ねん」よりも自然度が低いと思われる。披瀝の用法では「ねん」が優勢であると考えられる。言い切りの場合「んや」と「ねん」で「んだ」と「んだよ」に対応する違いが見られるが，次のような従属節の場合，「んや」も「ねん」もどちらも現れ，意味的な違いもはっきりしない。

(78)　今テレビ見てるんやから静かにして

(79)　今テレビ見てんねんから静かにして

(80)　明日授業あるんやけど何も準備してへん

(81)　明日授業あんねんけど何も準備してへん

「んや」は「んだ」，「ねん」は「んだよ」に相当すると考えられるが，標準語では当然ながら

「〜んだから」「〜んだけど」という形はあっても「*〜んだよから」「*〜んだよけど」という形はない。先に披瀝の場合言い切りの形では「んや」よりも「ねん」のほうが自然だとしたが，「〜んや」という形式が不適格とまでは言えず，「〜んや」も「〜ねん」も自分の情報を提示するという機能を果たすという意味では同じである。標準語でも同様に考えられ，(82)，(83)のように聞き手に対して自分の持っている情報を披瀝する場合，話し言葉としての自然度に差はあるかもしれないが，「んだ」と「んだよ」で意味的な違いはあまり見られない。

〈披瀝の場合〉

(82)　私，辛いもの苦手なんだ

(83)　私，辛いもの苦手なんだよ

(82)は命題内容を〈事態が成立するという判断は済んでいる「のだ」〉のみで提示し，(83)は命題内容を〈事態が成立するという判断は済んでいる「のだ」〉＋〈その情報について独占的に知識管理する「よ」〉で提示している。自分の情報について披瀝する場合，自分の情報なのだからその情報について判断をおこない確定させる（→のだ）ことは当然であり，したがってその情報について排他性をもって独占的に管理する（→よ）のも当然である。このため，「のだ」に「よ」の機能を付加しても，自分の情報について独占的に述べる，という意味では違いがあまり出ない。「んだ」と「んだよ」の違いがはっきり出ないとすると，「んや」と「ねん」も自分の知識・情報を披瀝する場合には機能差がなくなると考えられる。従属節の「のだ」は自分の知識・情報を述べるものであるので，同じ機能を持つ形式として「んや」と「ねん」が用いられるのではないだろうか。

5．広島方言・関西方言・標準語の「の（だ）」関連形式の比較

以下では関西方言，標準語の「の（だ）」関連形式との比較から広島方言の「の（だ）」形の特徴を分析する。

5.1.「のだ」と「のだよ」相当表現の比較

広島方言，関西方言，標準語の「のだ」と「のだよ」について，音韻的な異形態を省略してまとめると次のようになる。

標準語	のだ	のだよ	のよ※
広島方言	んじゃ	*んじゃよ	んよ
関西方言	んや	んやよ※	ねん

標準語は「よ」がつく場合，「のだ」に「よ」が付加され「のだよ」となる。「のよ」という

形式もあるが，女性的なニュアンスを伴う。それに対して広島方言は「んじゃ」に「よ」がついた「*んじゃよ」という形は許容されない。名詞化辞「ん」に「よ」がついた「んよ」という形になる。関西方言では「んや」に「よ」がついた「んやよ」という形もあるが，標準語の影響により近年生じた形式ではないかと思われ，定着しているとは言い難い。年代，性別などによって使用に差があると考えられる。「のだよ」に当たる機能を持つのは一般的には「ねん」である。このように見ると，西日本方言では名詞化辞＋コピュラ辞＋「よ」という形式ではなく，名詞化辞＋「よ」のほうが一般的であることが推測される。「ねん」も「のだよ」に相当するとしたが，「のよ」に相当すると記述することもできる。

3.2 でも述べたように，広島方言では名詞にも直接「よ」がつく。「〜だよ」という形も使用されるが標準語的な言い方であり，普段の会話では「〜よ」が一般的である。

(84)　A「あの子の誕生日何月じゃったかいね？」
　　〔あの子の誕生日は何月だったかな（だったっけ）？〕
　　B「10 月よ」
　　〔10 月だよ〕

関西方言では(85)，(86)のように「よ／だよ」以外に「で／やで」などの形式も現れる。関西方言では「〜んやよ」ではなく「ねん」が一般的であることを考えても，「よ」という形式自体あまり優位ではないと考えられる。

(85)　そこにあるで
(86)　それやで
(87)　そこにあるよ
(88)　それよ

広島方言では「(や) で」のような「よ」と置き換え可能な，終助詞的な形式はなく，(87)，(88)のように専ら「よ」が用いられ，「よ」が優位であると言える。

5.2.「のだ」形の比較

ここではコピュラ辞の活用による「のだ」の活用形，従属節，推量など「のだ」形が現れる表現について広島方言，関西方言，標準語の比較をおこなう。音韻的な異形態は記述を省略する。

標準語	のだ	のだろう	のだった	のだったら	のなら
広島方言	んじゃ	んじゃろう	んじゃった	(んじゃったら)	んなら
関西方言	んや	んやろう	んやった	んやったら	んやったら

標準語「のだ」，「のだろう」，「のだった」の形式は，広島方言では「んじゃ」，「んじゃろう」，

「んじゃった」，関西方言では「んや」，「んやろう」，「んやった」となり，コピュラ辞の部分が異なるだけである。「のだったら」のように「たら」がついた形は，関西方言では「んやったら」となり，よく使用される表現である。広島方言でも「んじゃったら」という形はあるが，「んなら」という「なら」がついた形で言うほうが一般的である。関西方言では「なら」を用いた形式は用いられず，「んやったら」が用いられる。

(89)　明日5時に起きるんなら，はよ寝(ね)んさい
　　〔明日5時に起きるのなら，早く寝なさい〕

(90)　明日5時に起きるんやったら，はよ寝(ね)ーや

『方言文法全国地図』第134図は「家に**来るなら**，電話をしてから来てくれ」と言うときの「来るなら」の部分をどう言うか，という仮定形「なら」についての質問項目であるが，広島では「来るんなら」のように「んなら」という回答が見られる。「来るのなら」ではなく「来るなら」のように「の」が入らない形の質問なのだが，広島では「んなら」と名詞化辞「ん」が入った形になっている。東京では「来るなら」のように「の」が入らない形の回答となっている。広島方言では「〜なら」だけで言える場合でも「〜んなら」のように「ん」が入るほうが一般的であると言える。関西では「来るんやったら」のように「んやったら」が優勢で，「なら」形はあまり使われないことが分かる。また「んやったら」と名詞化辞「ん」が入る形で現れている。『方言文法全国地図』第130図は「もっと早く**来れば**良かった」のような「れば」仮定形についての項目である。この場合，広島では「来りゃー」（来れば）のように「ば」形が現れているが，関西ではここでも「来たら」のように「たら」が現れている。「れば」形が用いられるような場合には名詞化辞「ん」は入らない。

標準語	のだから	のだけど	のだって(伝聞)
広島方言	？？？んじゃから んじゃけー	んじゃけど	？？んじゃって んと
関西方言	んやから ねんから	んやけど ねんけど	んやって んやて ねんて

標準語で「のだから」，「のだけど」，「のだって」と「のだ」が現れる形式について見てみる。「のだから」の場合，広島方言では理由の接続助詞には「けー」が用いられるため，「？？？んじゃから」はふつう使用されない。「んじゃけー」となるのが一般的である。「から」が用いられる場合は「んだから」のようにコピュラ辞「だ」が現れ標準語と同じ形になる。「けー」が用いられる場合，コピュラ辞は「じゃ」であり「*んだけー」のような形にはならない。関西方言の場合，「から」が用いられ，「んやから」，「ねんから」のようになる。「んや」以外に「ねん」という形式も従属節に入るのが特徴的である。また「から」が用いられるという点が標準語と

共通する。「のだけど」の場合，広島方言では「んじゃけど」となる。関西方言では「んやけど」，「ねんけど」となる。この場合も「んや」以外に「ねん」という形式も使用される。(91)のような言い切りの「のだって（伝聞）」の場合，広島方言では「？？んじゃって」という形式は一般的でない。このような伝聞の場合，(92)のように「んと」という形式を使うのが一般的である。「って／んだって」のような「って」形はもともと広島方言では使われないため，「？？んじゃって」という形式があるとすれば，標準語形「んだって」と方言形コピュラ辞「じゃ」の混交によるネオ方言的な言い方として使用されていると考えられる。関西方言では標準語と同じく「って／て」形が用いられ，「んやって」，「んやて」，「ねんて」のような形式となる。

(91)　あとで食べるんだって。
(92)　あとで食べるんと。
(93)　あとで食べるんや｛って／て｝。
(94)　あとで食べんねんて。

標準語では(95)のように「んだって」の後ろに「言ってたよ」などの形式を続けることができるが，(96)，(98)のように広島方言，関西方言では「んと」，「んやって」の後ろに続けることは通常ない。(97)，(99)のように「〜んじゃ」，「〜んや」に直接「言う」が続くのがふつうである。あるいは(101)，(102)のように「んじゃ」，「んや」を使わずに言うことも多いと思われる。

(95)　あとで食べるんだって言ってたよ
(96)　*あとで食べるんと言うとったよ
(97)　あとで食べるんじゃ言うとったよ
(98)　？？？あとで食べるんやって言うてたで
(99)　あとで食べるんや言うてたで
(100)　あとで食べるって言ってたよ
(101)　あとで食べる言うとったよ
(102)　あとで食べる言うてたで

標準語	ので(は)ない のじゃない (んじゃない)	のに (なのに)	ので (なので)
広島方言	んじゃない	のに (なのに) (？？？じゃのに)	ので※ (なので) じゃけー
関西方言	んやない	のに (やのに)	ので※ ？？？やので やから

「のだ」の否定形「ので（は）ない」は，広島方言は「んじゃない」，関西方言は「んやない」となる。この場合の「じゃ」，「や」は「ではない」の「では」に当たる部分であり，標準語では基本形の「だ」と否定形の「では（ない）」，「じゃ（ない）」が違う形になるが，広島方言，関西方言では基本形も否定形に現れる部分も同じ形「じゃ」，「や」になる。広島方言では「んじゃ」の否定形は標準語の口語的な否定形「んじゃない」と同じ形になる。

(103)　そっちに行くのではない

(104)　そっちに行くんじゃない

(105)　そっちに行くんやない

「のに」，「ので」は「のだ」形に含めてよいかという問題はあるが，形態的に共通性があると考え，記述の対象とする。「のに」，「のだ」は広島方言形も関西方言形も形は同じである。「のに」の前に名詞が来る場合，標準語では「名詞＋な＋のに」となる。広島方言でも同様である。「じゃのに」という形式もないとは言えないが，実際に使用されるかどうかは明らかでない。標準語でも「だのに」と言うことがあるのと同様である。関西方言では「やのに」という形がふつうに使用される。「ので」は通常，広島方言，関西方言ではあまり使用されない。「ので」は原因・理由を表す表現であるが，広島方言，関西方言で原因・理由を表す場合，広島方言では「けー」，関西方言では「から」を使うのが一般的である。「ので」「なので」という表現も使わないことはないが，〝標準語的な〟言い方である。

6．「のだ」形からみる広島方言の特徴

ここまでの比較から明らかになった広島方言の性質について，標準語･関西方言との共通点，相違点をもとに考察をおこなう。

まず，「のだ」形の名詞化辞「の」が，平叙では「ん」，撥音（否定「ん」）に続くときは「の」となる。

標準語：「行くんだ」「行かないんだ」

広島方言：「行くんじゃ」「行かんの(ん)じゃ」

名詞化辞「ん」に，終助詞「よ」や引用形式「と」がつく場合，コピュラ辞「じゃ」が現れず，「ん」に直接「よ」や「と」がつくのが一般的である。また標準語で「来るなら」のように名詞化辞が入らなくてもよい場合でも，広島方言では名詞化辞「ん」が入る。広島方言では名詞化辞の働きが大きいと考えられる。

標準語：「行くんだよ」「行くんだって」「来るなら」

広島方言：「行くんよ」「行くんと」「来るんなら」

名詞化辞が「ん」であることやコピュラ辞が現れずに後続要素に続くことは，広島方言の特徴であるが，各地の西日本方言にも共通する特徴ではないかと推測される。

関西方言には「んや」以外に「ねん」という別の形式の「のだ」類似表現が存在するが，広島方言にはそのような形式はなく，名詞化辞（の／ん）＋コピュラ辞（だ／じゃ）で表すという点は標準語と共通する。しかし終助詞「よ」が付加される場合，標準語は「の＋だ」に「よ」が付加され「の＋だ＋よ」となり，「だ」と「よ」は連辞関係にあるように見える。一方，広島方言では「ん＋じゃ」，「ん＋よ」と，どちらも「ん」のあとに付加され，「じゃ」と「よ」が一見，範列関係にあるように見える。標準語と広島方言では名詞化辞，コピュラ辞，終助詞の機能や用法が異なることがうかがえる。広島方言の統語的特徴を明らかにするためには，「のだ」形にとどまらず，コピュラ辞「じゃ」，終助詞（「よ」「ね」「わ」など），名詞化辞「ん」それぞれの用法についてのさらなる考察が必要である。

広島方言の「のだろう」，「のだった」などのコピュラ辞の活用による「のだ」の活用形は「んじゃろう」，「んじゃった」などコピュラ辞が異なるだけで標準語と同じような用法である。仮定形「なら」の場合も，標準語と同じく「んなら」という形式が用いられる。一方，同じ西日本方言である関西方言では「なら」は用いられず，専ら「んやったら」のように「たら」が用いられる。近年，関西方言の影響力の強さから「たら」形が西日本各地に広まっているとされ，広島方言も影響を受けていないとは言えないが，今のところ従来の「（ん）なら」形を保っていると考えられる。「なら」や「たら」，「れば」のような仮定形についても，各地の方言で使用に差があると思われ，これらの比較検討も必要である。

従属節の「のだ」形は，「のだけど」の場合，広島方言では「んじゃけど」と標準語とコピュラ辞が異なるだけである。「のだから」の場合，広島方言では「から」という形式が方言形では用いられず「けー」という形式が一般的であるため，「？？？んじゃから」という形は通常使用されず，「んじゃけー」という形が使用される。「ので」という形式もあまり用いられず，理由を表す場合はほぼ「けー」が用いられる。一方，関西方言では「のだけど」，「のだから」の「のだ」の部分に「んや」，「ねん」が用いられる。この点は標準語とも広島方言とも異なるが，「さかい」などの方言形でない「から」という理由の接続助詞が一般的に用いられる点では標準語と同じである。また，引用（伝聞）形式の「のだ」形でも，関西方言は「んやって」のように標準語と同じく「って」の形式が使用されるが，広島方言では「んと」が一般的であり，方言形を保っている。関西方言は西日本方言の中で影響力の強い方言であり，話者は標準語・東京方言に対して対抗心，抵抗感が強いとも言われるが，広島方言などと比較して，文法形式に標準語の影響を受けているように見えるものもある。理由の「から」，引用の「って」のほかにも，アスペクト「てる」（←「ている」），否定辞「ない」（あるいは「てる」の否定形「てない」），など，使用頻度が高い文法形式に標準語化が見られる。

関西方言：「眠いから（寝る）」「高いんやって」「壊れてる」「壊れてない」

広島方言：「眠いけー（寝る）」「高いんと」「壊れとる」「壊れとらん」

広島方言では「けー」，「んと」，「とる」，「とらん」など従来の方言形式が優勢である。もち

ろん関西方言で在来の方言形が保たれているものもあるが，上記のような文法形式は関西方言で標準語化が進んでいることがうかがえる。広島方言はアクセントが東京式であることや標準語に対する抵抗感があまりないことなどから，標準語化が進んでいてもおかしくないように思えるのだが，上記の文法形式など在来の広島方言形が優位に保たれている。広島方言は西日本の中で九州方言ほど古態を残しているわけでもなく，関西方言ほど独自の形式が発展しているわけでもない。その他の方言と比較して際立った言語現象があるわけでもないが，その中間的な性質ゆえに，かえって標準語や他方言の影響を受けにくく，在来の方言形が保たれているのかもしれない。標準語化あるいは関西方言化が進む中で広島方言はどのような動態を見せるのか，その詳細を記述することで広島方言の性質を明らかにしていきたい。そのためには音韻，語彙，統語にわたって体系的な分析が必要である。標準語や他方言との比較から，従来あまり取り上げられることのなかった広島方言の特質について記述を進めたい。

（たかお　ふみ・言語文学専攻）

引用・参考文献

鏡味明克　1982「2　中国方言の語彙」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）1982『講座方言学 8　中国・四国地方の方言』国書刊行会
加藤重広　2003　富山大学人文学部 2003 年度前期言語学特殊講義ハンドアウト
加藤重広　2006『日本語文法　入門ハンドブック』研究社
神鳥武彦　1982「4　広島県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）1982『講座方言学 8　中国・四国地方の方言』国書刊行会
陣内正敬・友定賢治（編）2005『関西方言の広がりとコミュニケーションの行方』和泉書院
友定賢治　1995「関西弁は方言を変容させるか」『言語　別冊』第 24 巻　第 12 号　大修館書店
野間純平　2013「大阪方言におけるノダ相当表現：ノヤからネンへの変遷に注目して」『阪大日本語研究』25　大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
平山輝男編　1998『日本のことばシリーズ 34　広島県のことば』明治書院
松丸真大　1999「京都市方言における「ノヤ」「ネン」の異同」『阪大社会言語学研究ノート』大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

国立国語研究所『方言文法全国地図』PDF 版
http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html